翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（十）

肥留川嘉子
隅田三鈴

凡例

一、「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（九）」（『光華日本文学』第十八号、平成二十二年十月）の後を承けて、京都光華女子大学図書館蔵『雪梅芳譚犬の草紙』の「五編下」を、図版を掲げつつ翻刻する。合巻『雪梅芳譚犬の草紙』については、「初編上」の翻刻を掲載した『光華日本文学』第十二号の「凡例」を参照いただきたい。

一、翻刻の方針のみあらためて掲出する。

1、図版は各丁見開きを一面とし、丁付けにより「一ウ、二オ」のように示す。

2、本文翻刻は、やはり〔一ウ―二オ〕のように冠し、改行位置は／で示し、丁移りは　］で示すが、書入れについては丁付けにこだわらない。

3、一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ半丁ごとに分離する。
4、原文はできる限りそのままとするが、漢字仮名とも、異体字、略体字は現行のものに改めた。
5、読みやすくするため、句読点を補い（ただし、序文の句点は原文のままとし、その旨を断わった）、会話文については「　」を、会話中の会話文には「　」を補った。原文にある「　は『　に改めた（原文の　」あるいは　』は、　』とした）。さらに仮名を適宜、漢字に置き換え、その場合もとの仮名をルビに移した。
6、原文の振り仮名は、右と区別するために（　）に入れた。ただし、袋・表紙および序文等、一部原文のままの振り仮名に（　）をつけなかったところがある。その場合は、その旨を断わった。
7、書入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に記した。
8、本文中にある読み進めるための合印については、すべて●で統一した。
9、「初編下」に至って出てきた、本文中の○（段落を改める意識で使用されている模様）は、その位置にそのまま翻刻した。

一、末尾に、前号までに倣って、「五編下」に出るもののみながら、登場人物名（まれに地名もある）と、元の読本『南総里見八犬伝』の相当する名称との、対照表を付した。

図版 1　五編上原裏表紙（色刷）、五編下原表紙（色刷）

〔原表紙〕　（振り仮名は原文のまま）

雪梅／芳譚　犬の草紙／一名八犬傳

一陽齋豐國画

蔦吉板

五編下

〔原表紙見返し〕

いぬの／さう／し

五編／下帙

笠亭仙果鈔録

一陽齋豐國画

紅英堂梓

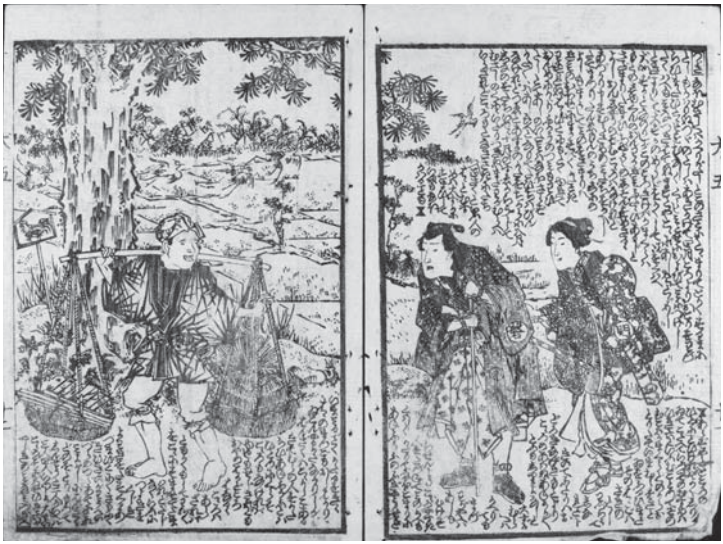
図版 2　原表紙見返し（色刷）、十一オ

〔十一オ〕

三

二の巻つゞき

斯ゝりければ、結城にて討／死したりし者共の子供、孫等を／召し出だされ、親の忠義を賞美／あつて家を興させ給ひければ、非義六／「時を得たり」と喜び、鎌倉へ／馳せ参じ、大須賀正作が姉娘／の婿の由申上げ、恩賞を／請ひけるが、偽りならねど非義六は／武士になすべき人柄ならずと、／村長に取り立て給ひ、刀／差すこと許されて、八丁四反の／地所を賜ひ、「陣代大ぎし／ひやうゑのじようが下知を承けて務めよ」と仰せ／に、非義六勇み立ち、帰るとそのまゝ家建て広げ、／冠木門さへ厳めしく構へて、下人を七八人／召し使ひつゝ身を／高ぶり、人を見／下し百姓を／はや責め徴りて／利欲を事ゝし、／人は憎めど●●仕合せの／良きに任／せて物／ともせず、／親に不孝の／瓶ざゝ等は／斯く成り出づるに／引き替へて、磐作／は信濃なる／千曲の出湯に／至り着き、湯／治の験は速／やかに



図版３　十一ウ、十二オ

て／手傷は／癒えしが、／如何にせん／腓の／筋／の／縮／み／しか、足／の／運び／自由／ならず。／縦しや／少しの／悩み／なく／ても／つぎへ

〔十一ウ―十二オ〕

つゞき　猶武蔵へは帰り難しと、この里に留まりて兎角する間に／年も変はりぬ。次の年は秋かけて四月頃より瘧をわづ／らひ、また一年を空しく暮らし、三年に及びて身に付けし／蓄へも皆尽き果てぬ。まことや此処に足を留めし／時よりして、大須賀の名字を隠して　、を加へ／犬須賀と名乗りしが、「この頃聞けば鎌倉は／元の主君の御若君、再び主と／定まり給ひ、忠死の子孫を召さるゝ／由。恩賞望む心はなけれど、／預かり申す村雨の御太刀を返し／奉り、たんゑもんの討死の／由も申して、身の収まりは／君の仰せに任すべく、片時／忘れぬ母人にも疾く行きて／御目にかゝり、不孝の罪も詫び／たし」とて、足の痛みは猶去らず／片方は足萎へとなりて旅路は便／なけれど、杖と明日香の肩を力に、八月／信濃を

立ち出で、十月の末辛うじて／武蔵の国、至り着きぬ。まだ我が村へは／入らざれど、心許なさ先に立ち、／『正作といふ人の／母とむす／めは、大須賀に／住まひして／今も猶／変はることも●●あらずや」と所の／人に問ひければ、よく知り／ゐて答へて言ふ。『その娘は／非義六といふ婿取つて、その／婿は鎌倉殿からお／取り立て、今村長と／威を振るひ、また／その母御は／前の／年／患う／て／死な／れた」ト／聞いて二人はお／どろき嘆き、元来／心の合はぬ姉、うか〳〵／訪ふも思慮なしと、／大須賀／村／へは／帰り／ても／まづ／我が家へは／足も／向けず。／以前より心安き／人を訪ねて身の上も／詳しく語りて、猶細かに／姉夫婦の不行跡、／今見る如く語るを聞ゝ、／母の末期も推し量り／遺恨遺る方なかりしが、／磐作は此処彼処歩／きて村の人を語／らひ、「姉夫婦とは／一つに暮らす／心もなければ／許しもせじ。されども／親の墓所／離るゝ／心は／あら／ざれば、／兎も角もして我〳〵／を此処に住ませて賜／はれ」と他事／なく言ふに、／強きを／挫き／弱きを助くるあ／づま人、「憎さも憎／き非義六が横柄／面の面当てに、これ／みよがしに磐作／殿を取り持つて／進ぜう」と二人が言へば／三人四人、何時しか大勢／心を合はせ、非義六が／屋敷の南、つぎへ

〔十二ウ―十三オ〕

つゞき／や、／隔／たりて空家あれば／「これ究竟」と其処を／繕ひ、二人の者を／此処に住ませ、耕さねども／貸し代にて夫婦が食ひもし／着るほどの田畑を買ひて／これを与へ、磐作田／と呼びなしつ。／両人はその／情けを／喜び、／磐作は／子供を／集め、読み書きを導き／教へ、明日香は綿摘み」衣縫ふこと、女子供に／指南して、養はるゝ恩を／謝すれば、其をまたたゞには置かぬも／人情、時〳〵の畑物／心〳〵に贈りなどし、親切を／尽くしければ、磐作は村／内の者と仲良く、余／れりといふにはあらねど不自由／なく無事に月日を送るにも、／寺参りの行き来／なんどに非義六夫／婦に会ふこと／あれども、／彼もあち／らを向きて／過ぎ我

図版 4　十二ウ、十三オ

も／物言ふ心もなく、／況して彼処へ足／踏みする心は更に／なかりけり。非義六は生／死だに確かに知られぬ／磐作が、帰り来るさへ嬉しく／なきに、村人の贔屓強く世話を／するのを見聞くにつけ、憎、妬く腹／立、しく、また磐作が我が方へ疎〳〵しきを／散〴〵誹りて、「一丁 足らずの所 に住み／姉、姉婿の敷居も跨がず、礼儀も／法も知らぬ奴」と、非義六、瓶ざ、談合し／人をして磐作が方へ遣はし言はせけるは、／『村長殿、御上様から弟 御の●」●磐作殿へ、使ひのため参りました。「母／様の長患ひ、何不足なく介抱し、御遺言／故是非もなく非義六殿を呼び迎へ、絶えたる家を／興したは村中 の人が証人。それに其方は／討死もしかねて戦 の場を逃れ、遠くに隠れて／大切な親の死に目に会ひもせず、世間が広く／なったとて女を連れてうろ〳〵と帰つて来て、人を騙し／養 ひ受けて恥とも思はず、姉の／所へ顔出しもせぬは／人たる道知らず。此方の／人は大須賀氏の相続／人なり、村長なり。／兄 弟の誼みは／格別、長に無礼を／する者はこの村には／置き難

し。心得／違ひを後悔し／謝つてくれば／その分、さもなくは／立所に立ち／退け」との仰り／つけ」と言はするを聞ゝ／終はり、磐作はあざ／けり笑ひ、『時刻遅れて／若君達、父の命を救／はぬは是非もなきことながら、当の／敵をその場で討ち取り、御首／共ゝ隠し参らせ、親の許しし／妻に会ひ、それより千曲にて傷の／療治。重なる病に力なく」三年は他国に暮らししが、夢にも／知らぬ母御の御病死。その／不孝は／言ふ由／なけれど、／予て／よく／知る／姉の／不身持ち。／姉婿は／また何／ほどの●」●手柄を／してか／今の／立身。／これは我が知ら／ざること。主／君の形見」の御佩刀／村雨／丸は／此処にあれ／ど、●●／鎌／倉／殿へ／持参／せぬも／姉と威勢／を争はぬ／磐作が／心の潔白。／されどもおこ／なひ穢れたる／二人に物／言ふ心は／なし。いよ〳〵／当所に／置かじと／ならば［つぎへ］

〔十三ウ―十四オ〕

［つゞき］鎌倉／殿へ訴へ／出で、御裁／許を受け／申さん。／返答は／この／通り」と／言ひ放／たれて／使ひは／帰り、その由／告ぐれば非義／六、瓶ざゝ、／呆れ返／りてはら／わたを扱くが／如く口惜し／けれど、またふた／たび言ふ由／なければ、呟く／のみにてさて止みつ。／○それより／十年余りを／経てまた鎌倉に／事起こり、／左／兵／衛／督／成／氏／朝臣／管領／のりたゞ／誅せられ、／のりたゞ弟／ふさあきらに鎌倉を／追はれ給ひ、下総許我へ／落ち行き給ひ、猶も／戦は鎮まらず。斯ゝることを／聞くにつけても、片足萎へたる／磐作は、たゞ口惜しく思ふ／のみ、力無ければ思ひ絶えつ。●●されば明日香を／娶りてより、男／の子二人まで生ませ／けれども皆育ゝず。／夫婦三十の齢も／越え、また子も無ければ／夫も嘆き妻も／憂ひて、程遠からぬ／滝の川の弁財／天にこの頃明日香は／願立てして、「子を一人授け給へ」と／三年が間一日も／欠ゝさず朝毎に／詣でけるが、時に／長禄三年／九月二十日／余りの／月白を／「はや夜明け／そ」と時を／違へ、

図版 5　十三ウ、十四オ

夜更け／に例の／参詣し、／帰り来れ／とも●」●夜は猶明けず。／庚申塚の／辺りにしてふと／見返れば、背は黒く／四つ足白き犬の／子の、捨てられたると思し／くて人恋しけに裳裾に纏ひ／逐へども逐へども離れねば、可愛く／なりて立ち止まり、『犬は数多子を／生むもの。その子も必ずよく／育てば、生まれ子の枕には犬／張子を呪ひに据ゑて置くこと／のあり。見れば雄犬で愛らしや。／子をば欲しがる矢先にて、見捨て、／行くは気が、りなり。養はばや」と／抱き取る。この時、南の空より／して紫の雲舞ひ下がり、いと／美しき異形の女、黒斑の／犬に乗り、やう〳〵土に近づき給ふ。／日本の衣服は召し給へど、寺の●●天井、欄間などの天／人といふものに似たり。明日香は／自然と頭下がり、敬ひ／申せば打ち招き、手に持つ／珠を授け給ふ。「あら有／難や」と手を差し伸べ受けたる／珠は、手の股潜りて／犬の子の片方に落ちぬ。／珠拾はんとする／ほどに、姫神の／御姿は雲に隠れて／見えずなりぬ。明日香は／御跡伏し拝み、／夢見しやうなる

図版６　十四ウ、十五オ

心地／して珠を探せど、ある／ことなし。心は済まねど／是非もなく、犬掻き抱／きて家に帰り、怪しき／姫の御形、弁／財天とも思はれ／ねど、「斯様〳〵の［つぎへ］

〔十四ウ―十五オ〕

［つゞき］ことありし」と夫に語れば、磐作喜び、／『仏の化身か仙人か、兎にも角にも不思議の／示現、願望成就の験ならん。／授かりし珠の失せしは心／がゝりのやうなれど、それも定めて／後〳〵に思ひ合はすることあるべし。／我が家代々〳〵戌の字を名乗りに／用ゐて、戌が通り名。その上／不意に名字さへ犬須賀と／呼び変へしに、其方が拝みし／姫神も犬に召されて／おはししのみか、また犬の／子を拾ひ得たる。斯くまで／犬に縁ある／こと、●●不思議と／いふも／愚かなり。／その子犬／をも大／事にかけ、／いよ〳〵／信心怠るまし。／必ず良きこと／あらんずらん」と言ひ／聞かせしが、果たして／程なく明日香は身／籠り、次の年七月／戌の日、平

らかに玉の／男子子／生み落とし、／喜び／勇／み／て／育」つるに、／前〳〵とは／事変はりいと／健やかに／生ひ立つにぞ、／「さては彼の姫／神の賜ひし／子種に違ひはあら／じ」と猶弁天へも／御礼を申し、「子を／育て／かぬる／者は、／女の子は／●●男に／作り、男の子は女に／拵へ育つるときはよく育つと、／人言ひ慣はすことなれば、然様にすべし」と／明日香の言ふに、磐作もその意に任せ、／また「人の身の栄耀栄華も甚だ／しきは衰へやすし。細く長きを／目出度しと寿くこともあるなれば、お／なじ千歳を契る竹にも、篠は竿も／葉も細し。されば、この子を篠児と呼ばん。／篠児よ〳〵」と呼び慣れて、女仕立ての着物を／着せ、よろづ女々しく育つれども、骨組み／強く大柄にて、顔貌美しけれど／つゆばかりも女めかず、幼きよりはや／弓を引き、太刀打ち、馬乗ることを／好めば、父は心に深く喜び／数〳〵武芸を教ふるほどに、つぎへ

〔十五ウ―十六オ〕

つゞきいと疾く／覚えて心／様騒がし／からず。事能く／弁へ、親孝行の／心深く、友達と／争はず。斯ゝれば／親の寵愛は／何ゝ例ふる／ものもなし。」弓、木／刀は／兎も／角も、流石に／馬は飼はざれば、／庚申塚にて／拾ひ上げし／犬は年経て●」●大きく／なり、身内／黒く四つ／足のみ／雪の如くに／白ければ、／四つ白の／馬になぞ／らへ人の名／めかしてこの／犬を、よ四郎／とぞ名付けたる。／それをば馬の代はりに／して縄手綱口に／食ませ、誰教へねど／その乗り様／自然と法に／適へるは／物ゝ憑きて／教ふる／如く、親は／更なり、辺り／の人〳〵褒めの、／しる者も多く、／またその姿女にて／そのする業の勇み／猛きを可笑しと／笑ふ者もあり。／まことや篠児が三ツ／四ツの頃、辺りの」人の寄り集ひ／目覚ましきまで／奔走するを、例の／見聞ゝて非義六、瓶／ざゝ、生憎二人が／仲にも子は無し、／これさへ妬くうら／やましさに、「としま／さゑもんの／一族／ねりま／へいざゑ／もんの／●

図版７　十五ウ、十六オ

四

●家来なに／がしの娘／にて、四十二／の二ツ子／なれば／「一生／不通の約束／にて、筋目宜しき／所あらば養ひ／娘にやりたし」との／ことぞ」と仲立つ人の／あれば、これ幸ひと／貰ひ受け、名をはま／次郎と付けたりけり。「磐作は／武士に似合はず折角の男の子を／女に拵へ、その名さへ篠児とは／男にあらう名か。此方の子は女でも／小さい内だに男めかし、育／つるこそ心地よけれ」と、斯ゝる

●●名をさへ名乗らせけるなり。

〔十六ウ―十七オ〕

つゞき　○篠児九ツの秋の頃、母の明日香は心地／優れず病の床に打ち臥ししが、針も薬も／効ゝ目なく、日を重ぬるに従ひて、ひた弱りに弱り／行きぬ。磐作夜もろくゝ寝ず、思ひを苦しめ／心を痛め、篠児は殊更案じ惑ひ、日毎に医者の／元へ通ひ、薬

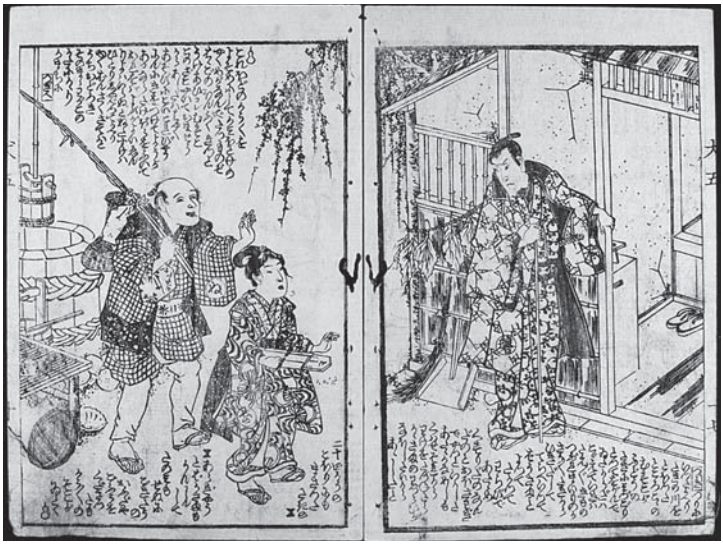
図版 8　十六ウ、十七オ

を勧め腰をさすり、病の紛るゝ／こともやと面白可笑しき物語、言葉静かに／語るうち、思はず含む目の涙、年端もゆかぬ／子心に斯くまで孝行尽くすかと、なか〳〵／母の胸板は張り裂くばかりに悲しきを、／互ひに隠して何気なく見するぞ／親子の誠なる。何時もの如く今朝も／はや篠児は薬を取りに行きし。あ／とに磐作病人の枕／近くへ火鉢を引き寄せ、面白／からぬ小鍋立て、白粥の下消え／がちの火を熾さんと、はた〳〵と鳴らす／扇も半開き。花の蕾の幼／子の帰らぬうちは「途中で怪我はせずや」と／待つにつけ、明日香は重き頭を擡げ、『御御足の／まゝならぬ上に男の身で竈働き、お気の／毒で見る目も辛し。それに篠児があの孝行。夫ゝ／子供の嬉しい介抱、死んでも心残りはない。／申し子とは言ひながら、二つや三つの頃よりも／年にも似合はぬ賢さ、利根さ。また若死でも／しはせぬかと、定まる命で育ゝぬならば、私が／寿命と取り替へて賜はれかしと、滝の川／弁天様へ日頃の願ひ。その験か虫気も／なく、疱瘡も遊んで済まし、子供の／

厄といふ年の七つも一昨年無事で越し、」もう大丈夫なその嬉しさ。存らへ／難きあの子の命、延ばして貰うた／ものならば、今年死ぬのは／予ての覚悟。薬 飲んだも／願立てした神仏へは／すまねども、御前と篠児が／折角の親切を無に／せぬばかり。斯う言ひ出しては／今日からは、薬を止めに致／しませう。御前こそ精出し／て御御足の療治して、／お忠実で篠児を育てゝた／まへ」と言ふも苦しき息／遣ひ。『子ほど可愛いものは／なし。生死が名代で／済むなら、世間に子を亡く／する親のあらう筈も／なし。そんな愚痴を思う／て居るから、気から落ちて／病 が治らぬ。母が／なくては子は育ゝぬ。不味／くとも先づこの粥でも／我慢してたんと食し、／薬 も飲みやれ」と磐／作は、障 子を開けて／門打ち眺め、『余り／篠児が帰りが遅い。何処に／道草食うて居るやら。／はて不思議な、縁端に／薬 の通ひ箱はあり。●」●そんなら何ぞ面白い／物を途中で見つけた故、／流石に薬 は取つて来て此処へ置くと／また駆け出し、遊びに行つたもの／でもあらう」『昼になつたら／お腹ゞ空いて、屹度帰るで」御座りませう」とそのまゝ／おきしが、八つも過ぎ七つに／なつても帰り来ず。只／事ならじと心 騒ぎ、／「日の短 き時には／あれど、背戸の榎 の／影もなし。もう／黄昏に程も／あらじ。其処らまで／出かけて見ん」と、／杖に縋つて／磐作は／門の敷居／を跨ぐ／ところへ、／背戸対ひ／なる百／姓 沼田助、／魚籠と釣竿／一つにたづ／さへ、篠児が手を／引き入り来り、／『定めて案／じて御座つた／らう。働く／ばかりも知恵／がないと、今日は／朝から神谷／川へ雑魚を つぎへ

〔十七ウ―十八オ〕

つゞき 釣りに／行つた帰り、／滝の川を／通つた／ところ、此処の／息子が／不動の／滝に水垢離／取つて拝んで／居た。体は／凍えて息は／絶えぐ〳〵、肝の／潰れまいものか。／早〳〵滝から／引き出して、／寺へ行つて／坊様と／寄つて／集つて／藁火で／暖め、／薬 だの何／だのと大騒ぎ／でやつと生かした。／温、かな飯も／

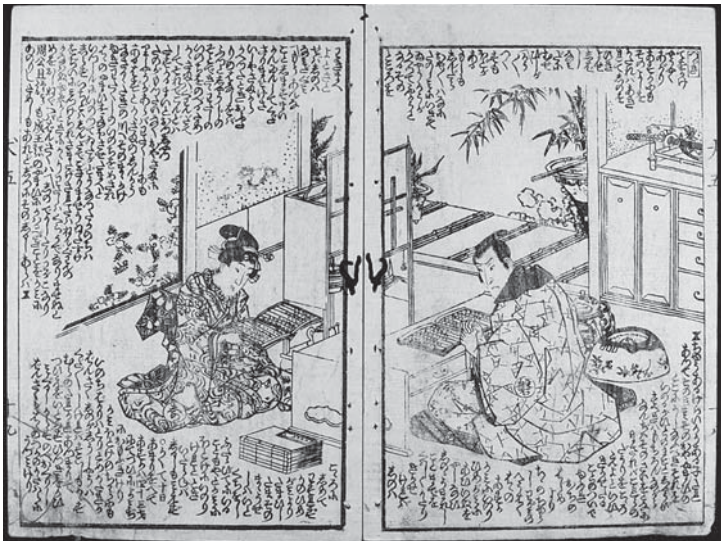


図版９　十七ウ、十八オ

食はせ、それから／訳を尋ねたら、／「母様の患ひが／治したいから／あゝした」と、」二十四孝の／氷にも／勝った／滝の／●●荒行／と、坊様も／感心／して、／頼みも／せぬに／御祈祷／の／御札や／御封を／下さつ／たも、／孝行の／そこが／威徳。／●●／此程の孝行を／余所目にして、神仏の／役目が何で立つものぞ。／母御の本復屹度／請け合ひ。コレ息子、／この雑魚焼いておませう／から、明日は早く／遊びに来い。これ病／人に気をつけて、用が／あるなら竹法螺を吹いて／俺をば呼ぶがよい。遠／慮は要らぬ」と沼田助は／一人喋つて帰り／行く。磐作「さては」と／打ち驚き、／そのまゝ我が子の／肩に掛ゝり／框に／つぎへ

〔十八ウ―十九オ〕

つゞき／手を掛け／漸く／上がり、／明日香にも／其の由を／語れば呆／れて篠児を／引き／寄せ、／暫／し／なみ／だに／噎せ／びしが、／『孝／行／尽く／すも／程が／ある。／もしも／死んだら／親



図版 10　十八ウ、十九オ

くは、何／楽しみに生きて／居やう。孝が／却つて不孝と／なる。其の／所を」弁へ／よ」と諭／せば篠児は／涙ぐみ、／『もうあんな／ことしますまい。／堪忍して下／さりませ。今朝／医者様から／帰つた時、御ふた／りの話をば／ふつと障子の／外で聞ゝ、私の／命を延べるため／母様は願立て／して、それで今度は／助かるまいと仰つ／たのが勿体なく、親様に／利生があらば私にも／ある筈と、母様の信仰／なさるゝ滝の川へそのまゝ駆け／行き、「私の命を召され／母の病を治させ給へ」と／一心に祈つて居たが、どうなつたか後は／知らず。一度は死んだで御座りませう。沼田助／御爺に見つけられ、妨げされたは念願の／叶はぬ故かと気にかゝり、私は苦労でなりませぬ」と、／目を押し拭へば磐作は、『篠児、出来したり、我が子なり。／周公旦も成王の病に代はるべきことを神に／祈りし例もあれど、実にその験あらば●」●忠ある家来、孝ある子、誰／あつてその君、その親、病の／床に喪ふべき。それを／祈るが人の真実。賞美／す

べきは勿論ながら、／汝はその才大人に／勝れば、此等の／道理を心／得よ」と言ひ／聞かせたる／事の序で、／結城／落ちの／始め／より／父の忠／死、我が身の／漂泊、／母の／明日香／神に祈り、／姫神に／会ひ犬を／養ひ、／篠児、生まれし／ことまでを／詳しく語り／聞かせ／ければ、／篠児は」心に／締めて／忘れず。／「彼の姫／神より／賜ひし／珠、その／ま、失せ／しはいと／口惜し。／再び手に入る／こともや」と神に／仏に祈り／けれと、時／至らねば／験も見えず。／○斯くて十日／余りを経て、／明日香は四十三才／にて遂に黄泉路／に赴きけり。／神仏の力にも／命ばかりは取り留め難きか、／磐作、篠児が愁傷は／くだ〳〵しければ少しも書、ず。／村の誰彼集まりて／費えを厭はず棺を買ひ、／見苦しからず野辺送りし、／磐作が母の塚の側らに／埋みけり。

〔十九ウ―二十オ〕

○昨日や今日と明日香のこと忘る、隙はあらねども、／涙の内に月日も経ち、何時しか三年を経たりけるが、／篠児は母に別れてよりいとゞ一人の親に仕へ、孝行／類もあらざれば、元来片足不自由なる／磐作は妻に離れ、片手も捥がれし心地ながら、／我が子の人に秀でたるその賢さと孝行に、末／頼もしく思ふものから、年〴〵に身の弱くなり、／まだ五十にも足らずして、歯も抜け鬢も白髪がちに／健やかなる日は稀なれば、手習ひ子供を集めんも／物騒がしとてこれを否みつ。さらばとて村人の／養ひを徒らに受けて暮らすも本意ならずと、心／爽やかなる折節、日照り、水入り、飢饉の手当て、／田畑の耕作、蚕養の仕方、未だ人の思ひ寄らぬ／利方を誰にも分かるやうに、詳しく仮名にて書き記し／老分らの者に贈り、養ひの恩に報ゆるに、／各〳〵これを読み浮かめ、「大須賀氏は武芸の達者、／手も見事ぞとは思ひしが、斯様のことさへその家で／育ちてそれを家業にする我〳〵が、ゆめ些か／心付かぬ様〳〵の仕方を、斯くまで能く心得、／惜しまず我等に伝授さる、は、二人とは世に／有

図版 11　十九ウ、二十オ

り難き侍なるを、今に未だ立身／出世をせられぬは、天道様もちと手抜け」と褒める／やら嘆くやら、互ひに写して仮初めの人には見せず／隠し置くを、非義六は聞ゝつけて、「見せよ」と言へども、憎がりて／事に託け早くも貸せねば、非義六は打ち腹立ち、／『鍬柄執りしこともなき痩せ浪人の／腰抜けが、何を知つてどのやうな／ことを書いたか、笑ひたさに「見せろ」と／言ふのに貸せぬも幸せ。見るも生／半暇潰し」と誹るものから」心には妬ましきこと限りなし。／非義六夫婦はあくまでも心様は／僻めども、立てたる見識あらざれば、／人真似することしば〳〵なり。磐／作が飼ひ犬のよ四郎は、生まれしより／十二年を経し古犬なれども、歯並／み毛の艶若きに劣らず、力／強く勢ひ猛く、村内の／犬一つとしてこれに怖ぢぬは／無かりけり。非義六これをうら／やみて、しば〳〵強き犬を／飼へども、皆よ四郎に噛み／伏せられ、必ず負けて／片端となり、軈て死ぬるも／多ければ、怒りに堪へかね／数多の人して棒尽くめに／遭はすれど、逸早く逃げ去つて／一棒も受けざれ

ば、非義六も力／尽き、今は犬飼ふことを止め、「世に犬／はかり騒がしく、禍〳〵しきものは／なし。昔は知らず、今時の犬は／物だに食はすれば、盗人にもよく／尾、振れば、糞に背戸をば汚さる、／ばかりで犬は無益のもの。猫こそ／人は飼ふべけれ。食ひ物、着物、屋財／家財傷をつけても手に余る／鼠を捕るもの他には無し。／その上目玉で時を告げれば、／釣鐘も時計も要らず。さて／犬なと、事変はり、物静かに●●優方にて、いと／愛らしきもの／なれば、はま次郎が／手遊びにもなりて、／彼さへ喜ばん」と、／俄に猫子を求め／しに雉毛なるを／一つ得たり。「磐作の／犬の名をよ四郎といふなれば、／我が猫は雉毛故き次郎と／定むべし。き次よ〳〵」と我も呼び、／人にも言はせて、首玉にも照鑑殿、光さへ／添へて威勢を張らせても、畜生は弁へなく、●●春の半ばも／過ぎゆけば、盛り時／とて友猫と妻／争ひの／果て〳〵は、／挑み／唸り／噛み／合ひ／つゝ、／或る／時／き次は／沼田／助が／厠／の／屋根に／挑み／居て、／友／猫に／追ひ詰め／られ、／つぎへ

〔二十ウ〕

つゞきころ〳〵〳〵と磐作が庭に／落つれば、側らに腹這ひ伏したる／よ四郎は、見つけてついと立ち上がり、／噛み倒さんと飛びかゝれば、き次郎は／驚きながら爪を以て／よ四郎が鼻柱を／掻き破らんと、その／勢ひは鋭けれど／物とも思はぬ／よ四郎は、猫の／左の耳を／銜へ一振り／振れば、耳元／よりふつつりと／掻き切れたり。／命限りに／外の方へ逃ぐるを／よ四郎追つかけて、／氏神の社の／辺り川ある所に／追ひ詰めたり。この／続きは第六編目。／まづ五編は／目出度し／〳〵〳〵。

○一寸御披露申上候

御薬　白粉／白芙蓉／一包／三十六文

図版 12　二十ウ、原裏表紙見返し

御薬／薄化粧／曙の冨士／一包　三十六文
御襟白粉／ぱっちり　一包／四十八文

右は／中橋／南傳馬／丁／一丁目／蔦屋吉蔵／方に／売り広め／申候。／外々の品とは／違ひ、極上製ニ／御坐候間、／御用被／仰付／可被下候。

仙果鈔録
豊國画

〔原裏表紙見返し〕

嘉／永／六／癸／丑／春／新／鐫／目／録

大晦日曙草紙　十九編／廿編　京山作／芳綱画
連理翅山雞奇縁　三編／四編　西馬補／芳綱画
八犬傳大の草紙　廿四編／ヨリ／三十編　マ／デ　仙果録
／豊國画／國貞画
松浦船水棹婦言　初／二／三　仙果録／國芳画
御贅美少年始　八編／九編　一九録／國綱画

図版 13　五編下原裏表紙（色刷）、六編上原表紙（色刷）

八重撫子累物語（やえなでしこかさねものがたり）　初／二／三　仙果錄／國貞画
俠客傳仆摸略説（けうかくでんおさなえとき）　八編／九編／十編　西馬譯／國輝画
／國綱画
花蓑笠梅雅物語（はなのみのがさうめわかものがたり）　初／二／三　西馬譯／國輝画
嶋巡浪間朝日奈（しまめぐりなみまのあさひな）　五編／六編　種員譯／國輝画
春柳錦花皿（しゅんりうにしきのはなざら）　五編／大尾　一九録／芳綱画
鹽屋（しほや）／文正（ぶんせう）古今草紙合（ここんさうしあはせ）　九編／十編　仙果作／國輝画
東都南傳馬町一丁目／地本錦繪問屋蔦屋吉蔵板

登場人物一覧（五編下）

次に『雪梅芳譚犬の草紙』五編下の登場人物名をかかげ（読み仮名・漢字とも表記は原文のまま）、その下の【　】に、相当する『南総里見八犬伝』の登場人物（その他）の名を示す。

大須賀磐作一戍（おほずかばんさくかづもり）【大塚番作一戍（おほつかばんさくかずもり）】

大須賀正作と後妻との間の子。美濃国垂井【樽井】にて、主君足利持氏の遺児春王・安王と父との三つの首を奪取した後、信濃国木曾の御坂まで逃げ延びる。そこで明日香と出会い夫婦となり、傷養生のため一時信濃国千曲に身を寄せて、その頃姓を犬須賀【犬塚】と改めた。故郷武蔵国豊島の郡大須賀【大塚】に戻ってから、明日香との間に一子篠児を設ける。

大須賀正作参戍【大塚匠作三戍】

足利持氏の家臣で、持氏の公達春王・安王の傅。磐作の父。春王・安王の処刑の場に躍り込み、敵を取ったが、その直後に自分も討たれた。生前、主君から預かった宝刀村雨丸を、子の磐作に託していた。会話にのみ登場。

明日香【手束】

御坂に住んでいた、ゐのだんゑもんなほひでの娘。磐作の妻となり、足萎えとなった夫を助けて千曲から磐作の故郷大須賀へと移り住み、十年余り経って一子篠児を授かるが、篠児が九歳の秋に四十三歳で亡くなる。

ゐのだんゑもんなほひで【井丹三直秀】

足利持氏の恩顧の武士。明日香の父。結城の合戦にて討死するが、生前大須賀正作と、互いの娘、息子を娶せようと約束していた。磐作の想念にのみ登場。

左兵衛督成氏【左兵衛督成氏】

足利持氏の末子で、春王・安王の弟。幼名永壽王【永壽王】。一旦鎌倉府の主に返り咲いたが、関東管領のりたゞ

を誅したため、のりたゞの弟ふさあきらに鎌倉から追い出され、下総国許我へと逃れた。

瓶ざゝ【亀篠】

大須賀正作と前妻との間の娘。磐作の腹違いの姉。父と弟が結城の合戦に出征した後、残された継母の看病を怠り、死後の葬送もそこそこに、予て言い交わしていた、やゝ山非義六を引き入れて婿とする。

やゝ山非義六【彌々山蟇六】

瓶ざゝの婿となって、鎌倉に返り咲いた成氏が結城の忠臣の子孫を召し出して報償した時、大須賀正作の姉娘の婿と言い立てて立身し、大須賀村の村長となる。

大ぎしひやうゑのじょう【大石兵衛尉】

磐作の故郷の大須賀辺りを統括する陣代。会話にのみ登場。

のりたゞ【憲忠】

関東管領。成氏に誅せられた。

ふさあきら【房顕】

のりたゞの弟。兄のりたゞを誅した成氏を、鎌倉から追い出した。

犬須賀篠児【犬塚信乃戌孝】

磐作・明日香の子。篠児の前に生まれた二人の男子がいずれも夭折したことから、丈夫に成長するようにと、名前から衣服まで総じて女の子のように育てられた。五編上の挿絵の書入れには、「犬須賀信乃」とある。

はま次郎【濱路】

としまさゑもん【豊嶋左衛門】の一族、ねりまへいざゑもん【練馬平左衛門】の家臣なにがしの娘だが、非義六・瓶ざゝの養女となる。五編上の挿絵の書入れには、「破魔児」とある。

よ四郎【與四郎】

磐作の飼い犬。黒犬だが四足だけ白い。子犬のとき庚申塚の前に捨てられていたのを、滝の川弁財天【瀧の川なる辨才天】に申し子のため参詣した帰り道の明日香に拾われ、その後生まれた篠児と共に育つ。

き次郎【紀二郎】

非義六、瓶ざゝの飼い猫。